

日本とイラン

北岡伸一

はじめに

昨年11月、イランに行った。以前、一度行ったことはあるが、ごく短いものだったので、事実上は今回が最初の訪問だった。

子供のころから、正倉院にはペルシャのガラス製品があると聞かされていたので、ペルシャという名前には何となくなじみがあった。唐の都、長安には、多くのペルシャ人が住んでおり、そこから日本にも来ていたらしい。『続日本紀』には、波斯人（ペルシャ人）李密翳に位を授けたという記述がある。

大人になってから強い印象を受けたのは、松本清張が1973年6月から74年10月にかけて朝日新聞に連載した小説、『火の路』（原題は『火の回路』）だった。ある国立大学の史学科の若手女性研究者が、飛鳥の石造物の謎を尋ね、その起源はペルシャのゾロアスター教で、斉明天皇はこれを信仰していたのではないかとという説に出会い、これを追及して行く話である。当時、私は東大の大学院の学生で、その小説に出てくる陰湿な大学研究室の様子は、どうみても隣の文学部の研究室のものらしく、へえ、学界というのはこういうところなのかと思いつながら、毎日、新聞が来るのを楽しみにしていた。また私はその後、立教大学法学部に就職するのだが、その小説の登場人物の一人はR学院大学の仏文科の女子大生ということになっていて、どう考えてもこれは立教大学文学部フランス文学科だった。そんなこともあって、私はとくに強い関心を持って愛読していた。

松本清張も、ペルシャと飛鳥の関係について、この説がとくに気に入っていたらしく、実際にイランを訪ねて本も出している（『ペルセポリスから飛鳥へ』1979年、など）。現在、斉明天皇が信仰したのはゾロアスター教だという説は、専門家の間ではあまり支持されていないらしいが、とにかく面白い本である。

ともあれ、今回のイラン旅行は、テヘランのみならず、シーラーズとその近くのペルセポリス、また、かつてエスファハーンは世界の半分といわれた美しい町、エスファ

ハーンに行き、ゾロアスターの遺跡も少しは見ることが出来て、大変に満足の行く旅行だった。ペルシャ文化の高度に洗練された美しさには、強い印象を受けた。

イランの歴史

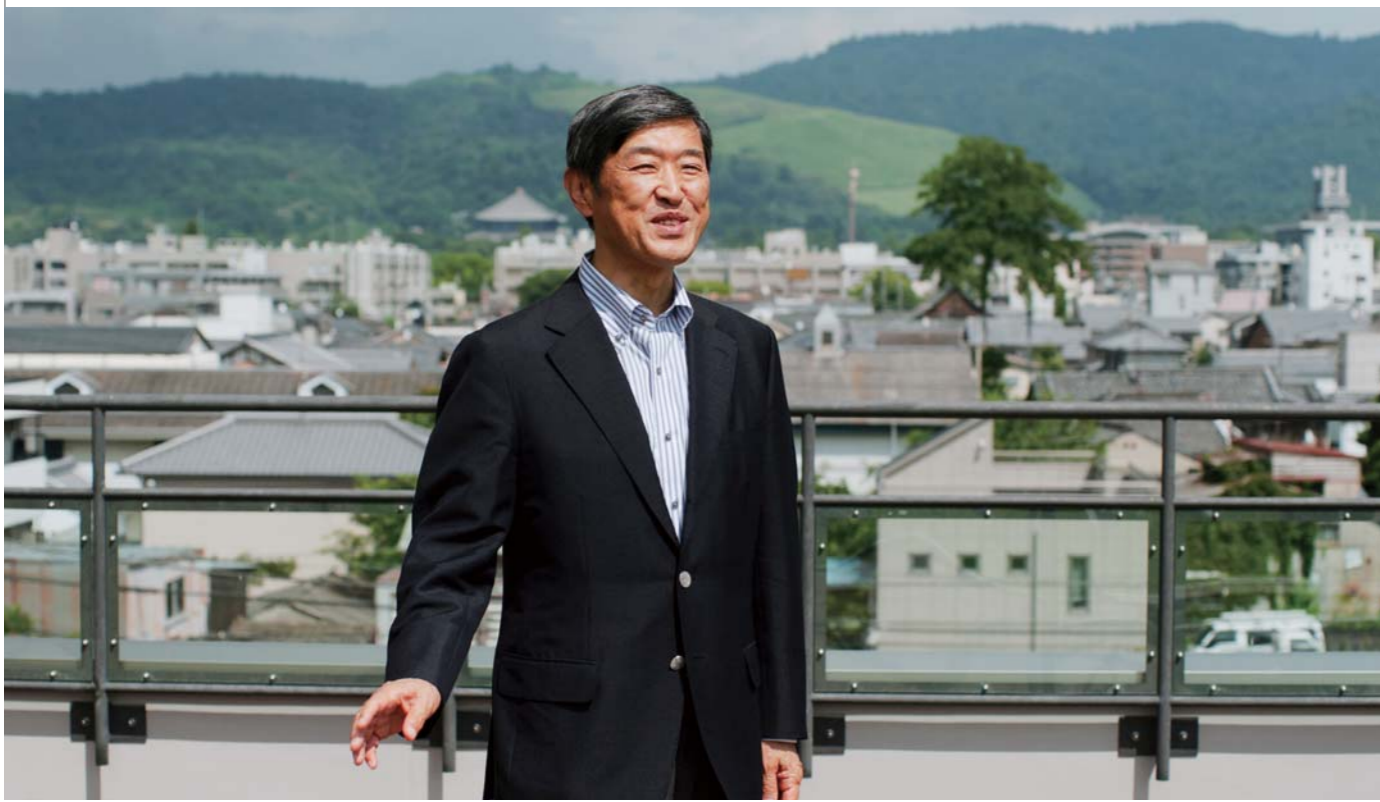
さて、ユーラシア研究センターといい、シルクロードといい、ペルシャは避けて通れない国なので、ちょっとおさらいしておきたい。ちなみに、イランとペルシャとは語源も違うし、別の言葉だが、現在ではだいたい互換的に使ってよいことになっている。

ペルシャは紀元前3000年頃起こったといわれているが、紀元前550年、キュロス二世が広大な領土を支配するようになり、やがて西アジア一帯にわたる帝国を樹立する。これがアケメネス朝で、世界史上最初の世界帝国だといわれている。

ペルシャ帝国はゾロアスター教を国教としたが、これを強制せず、とくにキュロス二世は、支配下に入つた民族に対して信仰の自由などを保障した。これを記したキュロス二世の円筒碑文は、世界最古の人権宣言だといわれている。

キュロス二世の円筒碑文は、世界最古の「人権宣言」

その後、ダレイオス一世のとき、ギリシャと戦って敗れ（ペルシャ戦争、紀元前492-449年）、ダレイオス三世のとき、アレクサンドロス大王の侵攻を受けて滅亡した（紀元前330年）。このあたりは、世界史の授業でなじみ深い。そのとき、首都ペルセポリスは炎上した



きたおか・しんいち

1948(昭和23)年奈良県生まれ。奈良県立大学理事長、国際大学学長、政策研究大学院大学特別教授。日本政府国連代表部次席大使(2004~2006)、紫綬褒章受章(2011)。「清沢別」(中公新書、サントリー学芸賞受賞)、『日米関係のリアリズム』(中公叢書、読売論壇賞受賞)、『自民党—政権党の38年』(読売新聞社、吉野作造賞受賞)、『門戸開放政策と日本』(東京大学出版会)など著書多数。